

製品開発におけるフロント・エンド・ローディング

— 製造メーカーにおける品質の課題と新たな方法 —

(株)ジョンクエルコンサルティング 落合 以臣

A Front End Loading in Product Development

“The problem of the quality in a manufacture maker and its new method”

Shigemi Ochiai, Jonquil Consulting Inc.

*Keywords: 製造メーカー・課題・品質・コストダウン・共通化・新たな方法*

近年の製造メーカーにおける問題は、山のように積み重ねられていると言っても過言ではないでしょう。あるいは、問題を積み重ねていると言った方が適当かもしれません。特に、自動車メーカーにおけるリコールは、何十万台といったように年々増加していることは周知の通りです。ひとつの部品が、部品の共通化という名の下に使われているので、その部品に品質的な欠陥が生じれば、すべての自動車に波及してしまうという現象です。いい意味ではコストダウン、省力化となるでしょうが、悪くは責任転嫁と言えます。そのように表裏一体を成す現象は、ものづくりにおいては新たな課題として受け取ることが極自然なことと思われま

す。こうした様子は、一見何の変哲もないこととみられるかもしれませんが、部品の共通化という大義名分によって、競争的な品質確保ができなくなってきたと言えます。例えば、種々な機種を合わせて月 80 万台の自動車を生産するとすれば、部品の共通化を行えば一社が供給する部品で 80 万台の車に利用できることとなります。確かに、機種ごとに部品を別々に供給させるよりも効率的なことは誰にでもわかることでしょう。しかしながら、品質の限りない向上といった面ではどうでしょうか。切磋琢磨を強いられる中で品質向上とコストダウンと比較した場合、供給先と供給側との間だけで繰り広げられるネゴでは、品質の確保を担保できるのだろうかという素朴な疑問が沸いてきます。それは、1990年代に実施した部品の標準化でコストダウンは図れたものの品質の低下を招いた現象が、20年という時を経てブーメランのように飛来してきたように思われます。

こうした状況の中で、我が国の経済環境を俯瞰しますと、4月から消費税がアップされたものの日銀の金融緩和策の継続によって、当分は円安が続くでしょう。その影響で、Made in Japan が加速すると思われます。しかしながら、かつての品質 is ナンバーワンの時代と違って、現状ではかなりその質が落ちていると言えます。そうなりますと、ただ日本で生産したものに Made in Japan というシールを張り付けただけでは、その効果を最大限に発揮することはできないと思います。今後は、ものづくりにおける単なる品質管理という概念ではなく、QA と QC の狭間にあるような新たな方法が必要とされるようになると思います。

今一度、ものづくりに携わるエンジニアは、品質とはという原点に立ち返って、その先にある新たな展開を創造することも重要なことではないだろうか。

この JQ International Review が、愛読される方の背中を押すことができれば幸いです。